

パネル IV

2. 一般病院と大学・研究機関附属病院 ——個々の例の比較——

仙田宏平

(藤田保健衛生大学衛生学部診療放射線技術学科)

目的：一般病院と大学・研究機関附属病院における核医学診療の現状を比較し、一般病院での核医学診療の将来的展望を検討した。

方法：東海地方にある600～1,200床の大学附属病院(以下、附属)4,700～900床の一般総合病院(以下、大病)3および330床前後の一般総合病院(以下、中病)2機関について、核医学診療施設、読図レポート作業など現状10項目を比較検討した。

結果：1)施設および運営は、院内配置をX線診断部との関連から比較すると、各機関とも隣接と別棟が相半ばした。X線診断部と比べた施設規模は、附属全施設が3割程度であったが、中病全施設が2割以下であった。インビトロ検査業務は附属全施設に存在したが、中病全施設でなかった。放射線科との運営面での関連性は、全施設で密であった。2)検査機器の整備状況では、SPECT装置が附属の1施設で3台以上、3施設で2台、大病の2施設で2台、1施設で1台、中病全施設で1台であった。PET装置は附属1施設の1台のみであった。3)スタッフの配置と員数は、専従医が附属の全施設で常勤していたが、大病1施設と中病全施設で不在であった。専従医がいる大病2施設のうち1施設には専門医が不在であった。診療放射線技師は全施設で、看護婦は附属2施設と大病1施設で、また受付は附属3施設と大病1施設で専従していたが、トランスクライバーは全施設で不在であった。技師と看護婦の配置転換は、附属1施設を除けば、いずれも1年以上の長期ローテーションであった。4)画像検査の実地状況は、年間取扱患者延数が附属全施設と大病2施設で3,000～5,000例であったが、中病全施設で1,000以下であった。

検査項目の内訳は全施設で日本アイソトープ協会の年次報告に見られる平均的パターンであった。SPECT検査の割合は、附属の施設で低かったが、大病と中病の各1施設では3割以上であった。専用読影室は、中病施設を除けば、全施設に存在した。放射線科以外の診療科の関与も、中病施設を除けば、全施設にあった。5)読図レポート作業は、カルテからの臨床情報の参照が大病1施設と中病施設を除けば、全施設で容易であった。前回時の画像データとの照合は、3機関の各1施設でのみ容易であった。読図レポートのファイリングシステムは大病1施設のみにあり、画像データのファイリングはどの施設でも行われていなかつた。6)他画像診断モダリティーとの連携としての院内PACSは附属1施設のみにあった。総合画像診断体制はどの施設でも行われていなかつた。7)核医学治療は、附属2施設と大病1施設で施行できた。8)施設管理などその他業務の専従者は、附属1施設を除けば、全施設で不在であった。9)研究活動は、附属全施設と大病2施設で比較的容易であった。10)研修教育および啓蒙活動体制は、附属全施設を除けば、不十分であった。

考察および結語：一般病院での核医学診療は、上述の結果から、次のとき改善が望まれる。まず、受付業務、読図作業および施設管理などその他業務の効率化を図るために、パソコンを導入する必要がある。次に、画像管理の効率化と他画像診断モダリティーとの連携を密にし、核医学画像診断精度の向上を図るために、院内PACSを導入する必要がある。また、核医学専門医の早急な増加が望まれる。